
ミナミナミ

鮎雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミナミナミ

【著者名】

鮎雅

【あらすじ】

「お願いあつち側のナミ、私を助けて！」

水たまりの向こうの世界は、主人公が住む世界とは全く逆、ほとんど同じの鏡の世界。そこでナミが頼まれた事とは？

新感覚回文ファンタジー！とか、自分で言つてみたりする。

「夜見てみるよ」「ええ、是非」

「君、気がつかなかつたのかね？」「え？」

「みんな見てるよ」「ああ」
こんな感じです。

あつちつちツアー

何気ない日常の中で極まれに起こる怪異　　というのは、小説の題材になりやすく、純文学、恋愛、SF、ファンタジー、時にはミステリーにまでその波は広がっている。

狐に恋した女子高生、ある日猫とも犬とも魚ともつかぬ不思議な生き物に「君は選ばれた」だの言われ世界を混沌の闇に包まんがして、いる魔王と戦う中学生、自分の瞳が逃げたから捕まえてくれと頼まれる探偵。

しかしお忘れなきよう・・・これは全て架空。非現実。桃源郷。フィクション。誰かが考え出した物語なのだ。いくら私達人間がそうあれと神に願つても、そもそも神なんて居るはずが無いのだからそんな事は天地がひっくり返らない限りあり得ない。

私は幼少の頃よりそれが現実になつたら面白いな、なんて考えて今日17歳の誕生日を迎える。可笑しいね、口では“そんな事はありえない”といいながら頭の中では“そうなつたらいいな”なんて考えている。もしかしたら人間は矛盾だらけの生き物なんじやないか。そんな矛盾を抱えながらも、心内で“あつたらいいな”と思つている人間。

それが私、南 ナミなのである。下の名前が何でカタカナなのかは知らない。何でフルネームで回文なのかも知らない。知りたくもない。私はこの名前、というだけで何度もかご先祖様を本気で呪おうかと思った事がある。全て計画のみで終わってしまったのだが・・・。しかしこの名字にしたご先祖と、この名前にした私の父を私は呪わずにはいられない。許されるならば、何故この名前にしたのかご先祖と父親を今すぐ私の膝元に呼び出して小一時間問い合わせたいところだ。それは何故か。この名前のおかげで小学生の頃のあだ名は「回文」だったのだ。そんな四文字の言葉を発するより、ナミと一緒に

字で呼べばいいものをと何度も思つた事か・・・

話を戻そつ、そつ何氣ない日常の中で極まれに起ひる怪異の話だつたか。

物語の始まりは、高確率で何かしら日常生活に“異変”が起きぬ限りその突拍子のない物語に巻き込まれる事はまず無い。（例外として、通行人Aとして登場する事ならあるかもしけないが・・・）

さて、私達人間はそんな予想もしない事態に直面した時に備えて準備などしているだろうか？ 答えはNOだ。そんな人間が居たとしたらきっとメンタルヘルスか脳内お花畠な人だろ？ 言つておくが、私はそのような類の人間ではない。

そつ。準備なんて出来ないので。逆を言えば、予想もしない・・・

普通の生活の中で出来た少しの綻び。それに事前に気づく人間がどこに居よう。

どこに、居よう。

「・・・あれ？」

瞬きを繰り返す。もしかしたらもといた所に戻れるんじゃないか、つて。しかし残念無念。いくらしばしば臉を往復させても目薬が恋しくなるだけで、目の前に映る灰色は消えなかつた。口はぼけつと開いたまま。今ぱつとピンポン球を私の口に投げたら、見事キャッチしてしんぜよう。

さてさて。これは一体どういう事だ。灰色の住宅街をぼてぼて歩いていただけなのに気がつけば私の周りは一面住宅街。言葉が可笑しいね、言い直そうか。ほとんど一緒、という言葉もあてはまるし全てが全く逆、という言葉もあてはまる。・・・どうこうとかって？ そういうならば・・・すべてが鏡なのだ。

そこら中に生えている木々がざわざわと風とともに大合唱した。まるで「お前は誰だ、お前はどこから来た」と私に問ひてゐるようだ。

そんなの、こっち聞きたいわ。

不思議摩訶不思議奇妙怪々魑魅魍魎・・・いや若干違うものもあるが、私の頭の中ではそんな漢字達が手を繋いで円を描いてよこよこさ踊っている。黙りやがれちきしょう。

風がざああ、とコンクリートを滑つて走り抜けて行く。その涼しさに、私は何故か奇妙な冷気を覚えた。見ると、私の今来ているセーラー服はっぷ濡れ。脱げている靴にもたつぶり水がたまっている。雨でも降ったのか、とあたりを見回してみるがそんな形跡はなく濡れているのは私自身だけのようだつた。・・・あたりを見回して、気づいた。私の隣で、私そっくりの女の子が寝ている。着ている服も全く同じ・・・違う。これも鏡。私は右目下に小さなホクロがあるのだが、この子は左目下だ。ちょうど鏡で同じ位置。うわあ、もしかしてドッペルゲンガーかな?しかし奇妙なこともあるものだ、私の寝顔つてこんな感じなのかな、と私がその女の子をじいっと六があくほど見つめていると。

「・・・ん

彼女が、目を覚ました。

「あ、えと、お、おはよ」

いやおはようじやないでしょう。なんて自分に突っ込みをいれる。だってそれしか思いつかなかつたんだもん・・・

「!」

彼女は私を見るなり、大口を開いて驚き飛び上がつた。その顔には、笑みが浮かんでいる。そして彼女は次の瞬間、私の手を取つてこういったのだ。

「お願いあつちのナミ、私を助けて!」

声まで同じとは、たまげたものだ。

私の喉が引きつって、頬を一筋の汗が伝った。その頬も、突然の事に思わず動き方を忘れてしまったように引きつっている。

助けて？助けてって言つた？この子。今、私に？しかも何、あつちつて？ていうかここはどこ？ビックリ？これって訴えた方がいいの？

「助け、る？」

「そう！」

ああ私はもうおしまいのようだ。めまいがしてあつたら死ぬはずのドッペルゲンガーに助けてとかいわれてる幻覚を見ている。

この時、私は思いもしなかつた。

この出会いが、私を大きく変える事になるなんて・・・って言つておけば物語っぽくなるかな。なんて思つたりしている私であつた。ああ、さつきはいらないなんて言つてしまつて申し訳ございません神様。異世界に飛ばすなら、せめて本の一冊や二冊・・・携帯電話だつて、持つて行かせて頂いても良かつたんじゃ・・・。そんな願いも天上の神には届かず、その雲は太陽を隠した。東に傾きかけている太陽の光を浴びて、私の目の前に居る彼女の涙がキラキラと輝いている。

苦労も過去か、もうつか

時間を、ほんの三 分前に戻そ うか。

私は学校からの帰路についていた。やがて、天気予報のとおりぽとぽと雨が降り始め、コンクリートに小さな染みを作った。私はふいと上を見上げると、その視界を水色で覆い隠した。手に持つていた傘をさしたのである。傘に跳ねる水滴は踊るように地面に落ちて、また染みを作る。そして、ねずみ色だった歩道はやがて黒く染まつていき、私はその上を靴音高く歩いていた。部活が早く終わった今日。まだ空は明るいのに、無機的な街頭の灯がともっているのに少しだけ違和感を感じる。私の通学路は閑静な住宅街で、しかも今日は雨という事で全くと言つていよいほど人が居ない。少しだけ寂しさを感じた私は、鞄から音楽プレーヤーを取り出して、イヤホンを耳に突っ込んだ。面倒くさくておまかせ再生をしたら、だいぶ前になかなりハマったナンバーが流れ出す。耳を走り抜けて行くギターの疾走感に快感を覚えながら、私はまた足を進めた。・・・進めようとした。ふと、水たまりに目を向けるまでは。

瞬間、私の目は大きく見開かれた。

水たまりには見飽きた自分の顔が映っていた。右のホクロ、ショートヘア、趣味の悪い黒セーラー服。水たまりに映るのは間違いない、この私南ナミのはず・・・。さて、こんな事があり得るだろ? 私はふと自分の口を確認した。まさか。思った通り、私の唇は私自身の意に背いて勝手に動くなんて真似はしていない。じゃあ何で・・・何で、水たまりに映っている私の唇は、なにかを叫ぶように動いているんだろう? あいにく私は読唇術など習得していないため、水に映る私が何を叫んでいるのかはわからない。しかし、あえて言つて いる事をあいうえおで表すならそうだね・・・。「あ」「う」

「え」「え」かな。そのぐらいの事は、私にだつてわかる。そんな事を思つている間にも、水面に映る彼女は叫び続けている。風がああと吹いて、街路樹の隙間を滑り抜けて行く。その背後からの風に、私の短い髪の毛はふわりと逆立つた。うすいセーラー服の生地に包まれた小さな心臓が、痛いくらいに胸を叩いてくる。頬を水滴がつたい落ちる。唇を噛み締めると、その痛みからなのか目にほんの少しだけ涙がたまつた。・・・きっと見間違いだ。私疲れているんだよきっと。そう思わなくては、と私は自分自身に叫んだ。見間違いじゃなければ、この状況をどう説明すればいい。それも私の本心なのだろうか。

やがて水面の彼女はガラスを叩くように、水たまりを固く握りしめた拳で水面を叩いて来た。その叩く音こそは出ないが、その衝撃から水面がかすかに揺らめいているような感じがする。その証拠に、水面には小さな波がいくつも出来、水面に映る彼女の顔が少しだけ揺れた。どうということだ、何故揺れている。とりあえず、水面に映る彼女が私自身ではないことは確かだ。じやあ誰だよ。誰なんだよ！「誰なんだよ」と叫ぶも、きっと声は聞こえないだろう。向こうの彼女の声が、私に伝わらないように。このままでは埒があかないと、私は手を伸ばした。何かわかるかもしれない。水たまりに触つてみよう、と。

その瞬間、彼女は微笑んだ。

時は戻つて三分後。

・・・そこで、私の記憶は途切れている。しかし私の置かれているこの状況、目の前で涙目になつて私の手を痛いほど握るこの子を見れば、その続きを容易に想像出来る。

私はどうやら、あの水たまりの向こうの世界に来てしまつたようだ。こちらの世界も変わらずさあさあと心地よい雨音をたてながらコンクリートに染みを作り、街路樹の隙間を風が滑り抜けていった。私

は濡れそぼった髪の毛を振り乱し手を振りほどき、転げ回るようにな
走つて背後の水たまりを見た。そこから見える世界は、何ら変わ
らない。ただ少し向こうに、私が少し前までさしていなかったであろう水
色の傘と、音楽プレーヤーが転がっているのがかすかだがわかる。
それを見て私の頭にのぼっていた血は一気に下がつた。少しだけだ
けど、冷静になつたようだ。私は、振り向いて目の前に居る彼女に、
「説明してくれるかな」と優しさを含んだ口調で言つ。彼女はにこ
りと笑つて、「どうやら、ここが貴方たちの居た世界じゃないって
ことは説明しなくてもわかつてくれたみたいね。さすが私」と言つ。
「ちょっと待つて、」私は目を見開いて、彼女に問う。「私って、
なに。どういう事?」彼女はため息をつきながら、呆れ気味に私に
言い放つた。「前言撤回。わからないかなあ、平行世界って知つて
る? ようはそういう事だよ。説明すんの面倒くさい」「平行世界・
・パラレルワールドってこと?」「そうそう。そうともいう。でね、
そのパラレルワールドで私と同い年で同じ外見で同じ学校に通つて
る私が貴方しかいなかつたの」「だから私を呼んだの?」「そう。
正確に言つと、呼んだっていうより繋げた。かな?」「そんな事は
いいの。早く用件を言つてよ」「そうだね、時間もない事だし」そ
ういつて、彼女はまた笑つた。
雨が止む気配はない。むしろ、これからもきっと酷くなりそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5875z/>

ミナミナミ

2011年12月21日17時51分発行